長大

『里山絵図』と『いきもの看板』完成！

「信州上田学」地域連携パートナー事業

上田市

『いきもの看板』をバックに、（写真左から）高橋教授、高橋ゼミ生2人、絵図を手にした古田教授

学生目線で作成した『里山絵図』

長野大学が上田市と連携して行う「信州上田学」地域連携パートナー事業で、①野倉・別所地区『里山絵図』②下喰池水鳥観察会『いきもの看板』の2点が完成、24日に長大地域づくり総合センターが事業成果を発表し、担当教員が説明した。

『里山絵図』は、信州上田学・地域連携パートナー事業「アグロフォレストリー・プロジェクト」参加の、同大環境ツーリズム学部・古田睦美教授と学生が作成。同プロジェクトは（一社）信州上田里山文化推進協会をパートナー団体とし、「地域住民、移住者、若者が地域の伝統文化を再発見し、古来から自然と共生してきた里山のくらしを伝承し、次世代へ受け継ぎ持続可能な社会を作ろう」と、里地・里山での体験や活動を展開するもの。

今年度は3学部から学生29人が参加し、野倉・別所温泉上手地区でワラビ田やウド畑、マコモ田、エゴマ田、竹林の整備・再生活動、またかまどご飯などの体験を重ね、日本遺産「レイラインがつなぐ太陽と大地の聖地～龍と生きるまち」の文化財学習やレイラインの科学的測定などを行った。その発見や感動を、「次世代を生きる者の視点から見た里山の魅力」として絵図にまとめたものだ。

古田教授は「学生は別所地区に残る昔の観光地図のレトロなカッコよさに感銘し、和テイストで斬新なデザインの絵図を作った。雨乞い関連「龍」の文字や「龍」を取り入れ、里山の自然に畏敬の念を抱く昔の人の精神性などを表現した」と話し、「皇子塚古墳を夏至の日の出を見るレイラインスポットとするなど、若者目線で魅力スポットを紹介している」とした。絵図は1000部作成し、市内公民館などに設置する予定だという。

『いきもの看板』は、同大環境ツーリズム学部・高橋一秋教授の里山再生学ゼミで2016年度から6年間、代々のゼミ生が観察を続けて得た内容をまとめたもの。同ゼミは、塩田平のため池群を利用する水鳥の調査・研究を塩田平のため池を愛する会、手塚自治会の協力を得て続ける。看板では、「下喰池で観察される鳥類」を、3シーズンに分類し紹介した。

繁殖期（6～8月）はカルガモ・カイツブリなど、池干し期（9～10月）はイカルチドリ・アオサギなど、越冬期（11～3月）はミコアイサ・キンクロハジロなど紹介。水草管理、池干し、水の利用と、ため池についても解説。高橋教授は「地元住民による、ため池の造成と水量と植生の管理により水鳥の生息地が維持されてきたこと、そして水鳥観察が、どの季節でも楽しむことができることを看板を通じ、観光客や地元の人に知ってほしい」とし、「子どもたちも読めるよう、漢字にはふりがなを付けた」と話す。

看板は横2尺×縦1尺の可動式で、屋内・屋外の様々な場所やシーンで活用していきたいとする。また今後、下喰池のある手塚地区の住民に看板を披露し、野鳥観察会を行いたいとした。